



Title	P C Jersild : En gammal kärlek (1995)をめぐり— 考察 : 男友達の安楽死実行に揺れる女医の心
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 1996, 12, p. 15-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

P C Jersild: *En gammal kärlek* (1995) をめぐり — 考察 —
— 男友達の安楽死実行に揺れる女医の心 —

菅原 邦 城

1. はじめに

1996年6月7日付けの各新聞は、京都府下の町立病院院長による“安楽死”事件を一斉に報じた。たとえば朝日新聞は「末期がん患者を“安楽死。”」の大見出しを付け、問題の院長が今年4月、末期がんで苦しんでいた患者に筋弛緩剤を使って死なせたと書いている。この報道は、5年前に起こった若い大学病院医師の医療行為を即座に連想させるが、後者の“東海大安楽死事件”では医師が殺人罪に問われて、すでに昨年度有罪判決が確定している。それだけに、今回のベテラン医師の行為はいっそう驚きをもって迎えられた。これが公になった初夏には、安楽死だったと断言して確信に満ちていたかのような院長の主張は、晩夏には大きく変質し、「顔がひきつり、苦悶の表情になった」のでその「ひきつりを取ってあげよう」としたのであって「生命を短縮する目的ではたのではない」と弱気に転じてしまった（朝日新聞8月30日）。いずれにせよ、たとえ院長といえども、患者自身や家族はおろか、「もう一人の主治医や他の医療スタッフに相談せず、独断で筋弛緩剤を投与してしまったのも問題」（柳田邦男氏談、同紙6月28日）であったことは、いうまでもない。

このような医療“後進国”の日本とは対照的に、年間2千人もの人間が自分の意思により安楽死を実行して命を絶っている国がある（NHK人体プロジェクト 1996: 29）。オランダである。同国上院は1993年11月、1971年に女性医師がその母親に行なった安楽死事件以来20年あまりに及ぶ国民的議論を経て「死体の埋葬に関する法律」を改正し、一定の条件を満たした場合については医師が患者を故意に死亡させてもやむをえない措置として医師の罪を問わないとした。その具体的な状況はケースによってさまざまだが、患者本人の一時的でない、はっきりとした意思表示を尊重してホームドクターを含む複数の医師、家族、看護婦や牧師らから成る介護チームが関わることになっている。それでも、司法当局が安楽死の諸条件を満たしていないと判断すれば、関係者が殺人罪で最高12年の懲役刑を受けることもありうる（前掲書：28-39，麓 1995: 234f. 参照）。ちなみに、今日世界で安楽死を明示的に認める法律（「末期患者の権利法」）が施行されているのは、本年7月1日以降のオーストラリア北部特別地域（准州）のみである（朝日新聞8月5日）。

明らかにオランダの状況に触発されて安楽死と、末期患者に対する医師の姿勢や対応をテーマにした小説が、昨年スウェーデンで発表された。長らく医師でもあった作家 P C Jersild (1935-) が書いた小説“*En gammal kärlek*”『昔の恋人』（直訳すれば『昔の恋』。Bonniers 社刊、278ページ）である。Jersild は、スウェーデン

の大病院と医師社会が抱えるさまざまな問題を取り上げた“Babels hus”『バベルの館』(Bonniers 社刊, 1978)によってスウェーデン中の注目を浴びるベストセラー作家となった。彼はまた、臓器移植問題を扱った“En levande själ”(Bonniers 社刊, 1980、拙訳『生きている脳』)も発表しており、この脈絡で安楽死について医師作家として Jersild がいかに考えているかを知ることが、彼の読者にとって大いに関心のあるところである。

この小説はさらに、35年ぶりに再会した中高年男女の愛情を二つめのテーマとしている(Dunér 1995: 20 参照)。女医の恋人に寄せる愛情が安楽死問題をめぐってどのように作用したかは、末期患者の身近にいる者の感情の動きを知らせて興味深い。はたして医師としての論理は、恋人としての感情をよく抑えるだろうか。

本稿ではまず最初に、安楽死に関する作者の考えを代弁していると考えてよい男性患者と、最後には安楽死の実行を決断するに至るものの土壇場で思いとどまった女医の関わり合いを、小説を要約する形でまとめてみる。次いで、中高年男女の愛情を、これをもっともよく体現している女医のとまどいと献身のあいだで揺れる心理を追いつながりながら見てゆきたい。そして終わりに、作者の両テーマの描き方をめぐる筆者の意見を述べてまとめとする。

すでに最新の文学史が「技術が仲間の人間たちに直面させているいよいよ困難になっている選択」(Hägg 1996: 632)を描いている作品として言及している、この長短48章からなる『昔の恋人』のあらすじは、女医が安楽死の実行を決断するに至るまでを追ってまとめると、おおよそ以下のようになろう。

2. *En gammal kärlek* のあらすじ

所はスウェーデンの首都ストックホルム、時は1994年の夏から冬。主人公は30年のキャリアをもつ女性医師アグネータ・シェディーン＝オースlund (Agneta Sjödin-Åhslund)。年齢はほぼ55才で、身長は158cm、小肥り。最近5年間は独り暮らしで、週に2日ほど老人ホームに老母ヤーダ(Gerda)を訪ねて食事の世話をしている。この老人性痴呆症の母に似た状態のメス犬クレオ(Cleo)が唯一の同居人である。アグネータは過去に2度結婚した。最初の夫ヤーン・シェディーン(Jan Sjödin、麻酔医で現在は救急医療会社社長)とは娘マリーカ(Marika、遺伝子学専攻)と息子ヨアキム(Joakim、哲学専攻の大学生)をもうけたが、夫の女性問題が原因となって10年後に離婚。それから5年して再婚した教授のエーリック・オースlund(Erik Åhslund、伝染病学)は、5年前にWHOの任務に従事中ケニアで事故死。彼女自身はもともと病院に勤務していたが、2年前市内に診療所を開いて、治療から年金まで各種の医療相談に応じている。そして毎週金曜日午後は、予約なしの患者を診ている。

そんな6月の金曜日午後、その日最後の患者として長身で痩せぎすの男性が入ってくる。アグネータはすぐ、それが誰か分かった。彼は名をアンドレース・エルマル・

ハルマンド (Andres Elmar Härmand) といい、1937年5月1日生まれで57才。後ろめたい気持ちのアグネータは、35年ぶりに挨拶の抱擁をぎこちなく交わす。というのも、2学年上の彼と彼女は、彼女が16才から19才まではほぼ4年間交際し、最後には婚約までしていた仲だったからだ。彼女に医学へ関心向けさせたのも彼だった。しかし彼女は、カロリンスカ医科大学の助手ヤーンに出会って1週間足らずで身も心も与えてしまい、1959年クリスマス、地下鉄車内で泣いて拒むアンドレースを振り切って別れた。第2次世界大戦のエストニア難民であったアンドレースは、アグネータに裏切られて一度は永住を決意してアメリカに渡ったが、1年ほどしてスウェーデンに舞い戻る。その後は会社勤務をし、最後には多国籍企業の人事担当重役になった。現在は年金生活者。彼の妻モーナ (Mona) は30年間の結婚生活ののち家を出、目下この夫婦は別居状態にある。二人には実子はなく、韓国人の養子エルマルを育てた。この息子は結婚してスウェーデン西部第一の都市 Göteborg に住んでいる。

アンドレースがなかなか来訪の真意を告げない。しびれを切らしてアグネータは尋ねる。

「じゃ、あなたは病気ではないのね？」

「病気も病気だよ。眠ることができないんだから」

さらに詳しい説明を求められて彼は答える。

「(略) 胃に関係があるんだと思う。(中略) 胃がすっかりひっくり返るような感じだった。しまいには黄色い粘液が出てきた。うん、それから血も一すじ」
(pp. 17f.)

彼はそれでも、2日後にはいつものように元気になったので医者に行くことはしなかった。アグネータは昔のボーイフレンドに対して、医者と患者の関係だけの問診をすることができず、逆流性食道炎ではないかという結論だけを告げて胃カメラ検査を勧める。別れ際にアンドレースは笑いながら言った。

「僕たちはいつかまたこの会話の続きができるだろうね」

他の男性であれば即座にノーと答えたはずのアグネータだが、自分が棄てた負い目から思わず応じてしまう。

「もちろんよ。そうしたらきっと楽しいでしょうね」(pp. 19f.)

アグネータはすでに更年期を越えており、逆戻りをする計画もなく、「肉体の愛はめったに、そのために払われる犠牲には値しないものだ」(p. 52)、あるいは「おそかれ早かれ人はいずれ独りになるものだ」(p. 73)と“達観”していたので、アンドレースとも親密にならないように努める。それでも、医師としてアンドレースの健康を心配するアグネータと、自分の健康状態を話題にしたがらないアンドレースは、数度食事やお茶を共にするうちに次第に接近してゆく。夏至すぎの夕方、彼女の自宅ベランダでそれぞれの両親の消息を語り合ううちに、若い時以上に打ち解けた雰囲気になっていった。

あまりにも汗ばんできたとき — 暮れはじめたばかりの夕べは熱帯並みに熱かった！ — ふたりは指先をからませていた。言葉の間合いはだんだん遠くなっていき、ふたりはただそこに、とほうもなく長い間知り合い同士だった二人の人間のように静かに座っていた。彼女はまるでとても長い旅から帰ってきたような感じだった。時は一時間また一時間と過ぎてゆき、そして太陽も沈んで、ほどなくベランダのプランターのゼラニウムの葉の間にきらめく赤い星のように見えた。部屋に入って食事をし、アグネータはアンドレースを寝室に導き入れた。しかし、彼女は心の準備ができていなかった！ 帰って、帰って…

彼は、まるで彼女の無言の抗議に気づいたように言った。

「ふたりとも寝入るまでここで君と手を握り合って横になっていてもいいかい？ 昔のようにね？」(pp. 83f.)

同じ週の金曜日から日曜日夕方までアンドレースはアグネータのところに泊まるが、ふたりの間にはなにも起こらなかった。しかし翌日、月曜日の夕べにまた彼女の自宅で会ったとき、ふたりは肌を合わせた — とうとう。昔4年ほど交際していたときは、アンドレースの強い希望で彼のために初夜まで「とっておく」(p. 94) はずだった関係だ。それから間もなく、アグネータはアンドレースを娘と息子に引き合わせて、ふたりの祝福を受ける。そのほっとした空気を破るようにして、アンドレースが急にトイレに立つ。戻って来ると、少し鼻血が出ただけだと言った。

8月に会って犬をつれて長い散歩をしたとき、アグネータはアンドレースの鼻血のことを心配して血球数を測定するように勧める。

「どうして？」

「あなたの年齢の人が鼻血を出すときは、偶然以外の何かっていうこともありうるわ」

「偶然以外の何かって、それはどういうことだ？」(p. 116)

気まずい雰囲気になって帰路につき、その途中でアンドレースが「協定」、紳士協定を結ぼうと提案する。

「つまり、君はこれからももっぱら僕の女であって、僕の医者ではないという協定」

「どうして？」

「僕が君に頼むからだ」

「妙な頼みだわ」

「頼むから」

「オーケー、あなたがそうしたいのなら、いいわ。私は口出しするつもりはありませんから」

「それは僕のためではなくて君のためなんだ。あるいは、むしろ僕たち双方のためなんだ。君が僕の健康についていろいろと考えると、僕は自分が注目されてい

る、監視されているって感じるんだ。分かる？ 僕は、妻が自分の夫にするようなふうにしてだけ観（み）てほしいんだ。約束するよ、僕は自分の血球数をチェックする。でも、君には心配してもらいたくない。僕たちが一緒にいるときは、君はいわば白衣を脱いでくれなくては。いいね？」(pp. 117f.)

やがてアグネータのマンションにアンドレースが移ってきて同居を始める。そのうち、アンドレースは息子を訪ねるために Göteborg に行くと言って家を出た。ところが実際にはストックホルム近郊の病院に入っていた。留守番電話で知らされて駆けつけたアグネータに、点滴を受けながらアンドレース本人が打ち明けたところによれば、彼が出血していたのは実は鼻ではなくて口からだったのだ。そして、だんだん痩せてきて、何かおかしいと感じて医者を訪ねたところ、即刻病院に送り込まれた。

「アグネータ、僕たちの協定を思い出して！」

「えー、えー！ でも、あなたは どうして私を瞞さなくてはいけなかったの？」

「君が自分を抑えることができるはずもなかったからだ。できたかね？ 君は口出しせずにはいられなかったはずだ」(pp. 130f.)

彼は彼女が診察記録を読むことも、医師と話をすることも断る。それでも最後には、彼女は自分が「身内」として担当医に尋ねることを認めさせた。医師の説明によると、アンドレースは食道が胃袋につながる個所にできた静脈瘤から出血しており、原因を突きとめようとして胃カメラ、超音波、腹腔鏡で調べてみたが判らず、さらには肝臓からの流れを悪くする癒着が発見されたため開腹手術が施され、いまは病理室からの検査報告待ちだという。アンドレースは2日後に退院。検査の結果、腫瘍のできていることが明らかになる。それでも彼は、ふたりが初夏に再会したところよりも若く、活発に見えるような生活を続ける。アグネータは、アンドレースはがんを患っているのではという不安に駆られながらも、例の協定尊重のために何も言えない。「尊重しないことは、彼を無資格者だと宣言するも同然」(p. 143) だからだ。

ふたたび病院に出かけたアンドレースは腫瘍専門医から、放射線治療は無理なので鎮痛療法を受けるように勧められる。そのあと数日は“夫婦”の静かな日常が続いた。そしてある土曜日、アンドレースは妻モーナと会って正式に離婚を申し入れるが、その別れ際に急に血圧が下がって倒れ、また病院に運び込まれた。輸血を受け、翌日の午前アグネータのもとに帰る。

「アンドレース、こんなこと私とても耐えられないわ！ あなたとの協定なんて守るつもりはありませんから」

「オーケー…」

返事はいとも簡単に、そして静かな声で返されたので、彼女は念を押すために繰り返して訊かねばならなかった。

「私たち、完全に同意したわよね？ 馬鹿らしい協定なんて、もう無しよ！ 私はいま現にそうである者として、つまりあなたの女、それからあなたの医者として

自由に行動しますからね?!」

「うん．すまない…」(p. 153)

その後アグネータは、ヤーンをふくむ大学時代以来の国内外の人脈を活用し、超一流の医師たちの手によってアンドレースのために最適な治療を実現しようとする。それを知らされてアンドレースが答える。

「僕の気持ちとしては、どんな治療も受けるつもりはない」

それから

「僕は死ぬだろう．いずれは」

彼女は顔をそらした．それを聞かされることはとても耐えられなかった．

「誰でもみんなおそかれ早かれ死ぬんだ」彼はほとんど愉快そうに言った．(p. 170)

「僕がしてもらいたいことはただ一つ、君が僕を見棄てないということだ！」

「ええ．しないわ、あなたを見棄てるなんて」(pp. 174f.)

アンドレースが受けたくないと拒んでいる治療とは、「八時間もの手術、僕を治（なお）せると主張されながらも僕を治さないだろう手術」(p. 174)なのである。「彼の状態は天気のように変わった．ときには秋の霧のように重く、その合間には全くの小春日和があった」(p. 189)．しかし小春日和のあと、彼の病状は確実に悪化してゆく．

「もしも耐えられなくなるようだったら… そしたら、約束してもらいたい」

「そうなるって誰が言ったのかしら？」

「僕は『もしも』って言ってるんだ」

「どんな約束？」

「君が早くことが済むようにしてくれるっていう」

「早く」？ どういうことだろう．もちろん誰も、彼が苦しむのを長びかせようなんて思っていなかった．そうすることは、生命の最終段階の治療に関する社会福祉庁の指針に反した．治療することが無意味ならば、治療は続けるべきではない．彼はいったい何を求めているのだろうか．

「どう言ったらいいのか私には分からないわ．私たちが話していることが何なのか私には分からないわ」

「何なのか？ 君が僕を助けるということだ」

「どんなふうに？」

「それは分かっているだろう」

「もしもあなたが、あなたが言おうとしているんだろうと私が思っていることを言おうとしているんだしたら、私は、それは許されていないとだけ言うわ」(pp. 191f.)

「だめよ、アンドレース．私はあなたに率直に言わなくては．そんな約束はできないわ」(p. 194)

アンドレースが求めた安楽死実行の約束を表面的には拒みおおせたアグネータでは

あったが、その心のうちは大いに揺れ続ける。そうしている間に彼はまず左足をひきずるようになり、背中に痛みが走り、立ったり座ったりするのが困難になってゆく。また腸閉塞も悪化していた。手術するまでには至らなかったが、苦痛緩和のために錠剤のモルヒネが使い始められる。そのせいか喉が渇き、昼夜が逆転し、さらには幻覚に見舞われる。脳への転移も疑われるようになった。この頃、アンドレースは自宅で世話をしてくれていたアグネータの娘で医師のマリーカに致死量のケトギン〔注：強力な鎮痛剤と鎮痙剤の混合薬〕を手に入れてくれるように頼んで、彼女をすっかり怒らせてしまった。アンドレースは、一日入院して輸血を受けて帰宅したあとは食事を摂ろうとしなくなった。再入院して集中治療室に移される。真夜中に目覚めて、アグネータと話しをしたがった。

「そろそろ潮時だよ」

「分かってるわ」彼女は答え、その瞬間に自分自身も決断したことを知った。そして、彼女が決断したことを彼が理解したことも。

「でも、少し時間をもらわなくてははいけないわ。しなきゃいけない実際的な準備がいろいろあるから。そのことは私たち、家でしたいわ。それから、他のだれにも知られたくないわ」(p. 261)

翌日午後に退院させられたアンドレースがベッドの中で脈絡のないことをつぶやく。そして

「痛いっ！」

彼女は彼にモルヒネ注射をしてやることに決めた。彼は痛みと苦しみながら寝ていることはできない。注射をすると彼は静かになった。彼は確かになにも言えないが、彼女を見る彼の様子から、彼は完全に覚悟して準備ができていることが彼女には分かった。いまが潮時だ。彼女がキッチンに行って要るものを取ってくるのを彼が待っていることは、見まちがいようがなかった。(p. 263)

しかし、彼女は実行できずに最後にアンドレースに告げる。

「ごめんなさい。でも、私はできないわ。もっと時間をもらわなくては」(p. 264)

その夜、息子の部屋で寝ていたアグネータが深夜に不安に目覚めて、寝室のアンドレースをのぞき込む。

彼の寝床は空っぽだ。彼はいなくなっている。ばかげた考えが彼女の頭のなかを突き抜けた — あーあ、ありがたい、あの人は天国に行ってしまったんだわ！私の助けなしで！(p. 265)

アグネータはしばらく、ボーッとしながらアンドレースがいなくなったことに安堵やら憤激やらを覚えていたが、クリスマス休暇で帰省してきたヨアキムの呼びかける声に我に返る。思い当って調べてみるとアンドレースの愛車のキーが消えていた。彼のBMWは冬のあいだ、3ブロック先にある地下駐車場に駐めてあった。それは、いざという場合には核シェルターとして使用される巨大な地下壕の中にあった。彼の駐車

スペースには車がなかった。彼はガウンを着ただけで、モルヒネのびんとアメリカで出版された『自殺のしかた』をもって出ていっていた。裸足でいったかもしれない。丸4日たって警察から連絡が入った。アンドレースは駐車場からは出ていかずに、他の階の空きスペースに移動していただけた。

警察によれば、彼は体を半分運転席にずり落として上半身を右側に倒していた。そばのシートにはビニールの袋があって、モルヒネのびんが入っていた。足には革の裏がついたヨアキムの冬用ブーツを履いていた。(p. 273)

彼女は寂しさを感じることは全くなかった。いちばん感じたのは安堵感、ほとんど感謝の気持ちだった。(p. 274)

彼の葬式は妻と息子夫婦が執り行ない、アグネータは空気同然に扱われた。それから1週間ほどして、アグネータの診療所にマリーカが法医学局の検案報告書を持って訪れる。彼の死因は「心臓発作」と記入されていた。

「ママ、理解して。あれは心臓発作だったのよ」

「だからってどんな違いがあるのか、分からないわ」

「もちろん違いはあるわよ」

「だめ、私は考え直せるかどうか分からないわ」彼女は小声で言って、ゆっくり頭を振った。(p. 276)

「ママ、本当にそうするつもりだったなんて言うんじゃないでしょ？」

「ええ。ええ、私はそのつもりだったわ」

「そんなこと、ママが言うなんてありえないわ！」

「そう、ある意味じゃやっぱり私も共犯だわ。そうする勇気とか力はなかったけど。私はそうしかったのよ」

マリーカは、自分ならばそのようなことをしようなんて決して考えることはないわと言った。そうするのは全く間違いなのだから。彼女はそれを確信していた。医療関係者の大多数が彼女の味方であることも確信していた。

「そのとおりだわ。みんな全員ではないとしても、多数派はそうね。でも、私はあなたと議論するつもりはないわ。あなたは私の立場にいなかったということを言いたいだけ。あなたは一度もほんとうにアンドレースに近い人間ではなかったのよ」(p. 277)

3. 主人公の心理

穏やかな日々を送っていた55才の女医アグネータ・シェディーン＝オースルンドは、十代の恋人アンドレース・エルマル・ハルマンドが突然、じつに35年ぶりに目の前に現れて彼の体にはんの一瞬、腕をまわして挨拶すると、高校時代のデートを思い出す。

彼の体を抱きしめることは、ちょうど映画を観たあとの最初の時のように感じら

れた。心地好かったが、でもちょっと気が乗らなかった。(p. 10)

それから間もないある一日、アグネータが帰宅するとドアのノブにバラの花束が掛けられている。花束に入れてあったカードには電話番号しか書いてなかった。アンドレースは昔から、自分のほうからは行動を起こさずに他人にそうするように仕向けるのだった。彼女がやむを得ず礼の電話をかけ、なりゆきから食事の約束をする。その当日、夫の死後5年ぶりに異性と外出することになって服装にあれやこれやと迷っている間に、老人ホームから電話がかかり、母親が熱を出したので娘であり医師でもある彼女は、見にきてほしいと要請されてしまう。アンドレースに連絡が取れないまま、夜の11時近くになってやっと約束の高級レストランKBに行く。彼は帰りもせず待っていた！ ふたりが最後の客として店を出るところには、北の空がかすかに白み始めていた。彼女の自宅まで、別れ際に彼が言う。

「僕たち、どちらも長く会わずにいるのはいやだね。電話をするということにしようか」

「いいわ、私たち電話をしましょ」

彼女は振り返らずに門へと急いだ。「私たち電話をしましょ」って、一体どんな意味だろう？ 誰が電話をするのだろうか？ 彼、それとも私？ (p. 41)

翌日アグネータが帰宅すると、ドアに鍵が掛かっている。息子ヨアキムが、前夜一目惚れした女性を追っかけてはるばる南の Lund から北の Umeå に向かう途中、首都の母親のもとに立ち寄ったのだった。

「ママ、どうした！ 調子はどう？ すごく元気そうだね、ほんと！ なんか楽しいことでもあった？」 (p. 49)

育ちのいい女性は自分から電話をかけない。しかし、アンドレースが連絡をよこさないで時間が経てば経つほど、ますます決断をする必要が強く彼女の上のしかなかった。沈黙を続けることで彼は全責任を彼女に押しつけた。(p. 50)

こうして、礼儀をわきまえたアグネータがふたたびアンドレースの電話番号を回す——「あのひと、留守だといけど」(p. 50)と願いながら。

なにしろ彼女はいまでも、ふたりが何をしようとしているのかよく分からなかったのだ。それは相変わらず昔を懐かしんでいるだけなのか、それともよりを戻そうとしているのか？ (p. 51)

結局アグネータは、6月下旬の火曜日朝7時半自宅での朝食に彼を招くことになる。およそ男女の親密な出会いになりそうもない時刻にしたのは、彼女が「男は彼女の人生ではもう終わってしまった一章であること、彼女がそっちの方ではようやく静けさを手に入れているとき、更に新たな失望にわざわざ自分をさらす気のないこと」(p.24)を確信していたからだ。

当日朝、約束の時間きっかりに現れたアンドレースをアグネータは、抱きしめる代わりにハンガーを差し出したほど冷静に迎える。彼はかつての学校仲間にはすぎない

のだから、それなのに、彼のプライバシーに立ち入ってしまった。前に会ったときアンドレースはアグネータを彼のヨットでセーリングに誘っていたのだが、そのために彼が遠く離れた西海岸にいるはずの日に彼女は彼をストックホルムで目撃していたのだった。

「いいや、あれはばかだった。どうってことのない嘘だよ。僕の病気のことで君を巻きぞえにしたくなかったんだ。君は僕の医者じゃないし。そうしたら、君を利用するみたいに思われたはずだ。実際…」

「利用する？ そうなら、何故あなたは私の診療所にやって来て胃のトラブルのことを話したの？」

「口実だ。僕は君に会いたかった。そんなに变かい？」

「口実って、何の？」

「それは君が察してると思うが」(pp. 62f.)

忙しい朝に続いて夕方、都心の公園 Kungsträdgården のカフェでまた話し合ったものの、ふたりの議論は並行線をたどるばかりだった。別れて彼女が自転車で自宅マンションの前まで来ると、アンドレースが待っていた。朝に忘れていった眼鏡を返してもらうためだった。アグネータが彼を中に招き入れてお茶の用意をしているあいだに、彼は居間の安楽椅子で寝込んでしまった。翌朝みると、アンドレースはヨアキムの部屋に入って寝ていた。彼をそのままにし、メモを残してアグネータは出勤する。

アグネータの手違いからアンドレースは日中留守番をさせられてしまう。カンバリを飲みながらふたりはバルコニーで、両親の話をしているうちにだんだんと打ち解けていった。それから、ふたりは食事を作ろうとして室内に入る。

彼女は冷凍庫をかき回しながら思っていた——私は何をしてるんだろ！ うちの中に、待っている男を入れている。待っているところか待ちすぎている男を！ もうあと戻りできないわ。でも、私はこのひとを欲しいのかしら？ 欲しい？ 欲しくない？ 欲しい！ (p. 83)

食事が終わって彼女が彼を寝室に導き入れたとき、彼女は心臓が早鐘のように打つのを感じた。彼女は急に彼を追い出したい不安にも似た衝動に駆られた。ずっとではなくて、今晚だけ。彼はまた朝食に来てくれていいわ。(p. 84)

この彼女の困惑を彼も見抜いたか、この時ふたりは十代のころと同じに、彼女のベッドで手を握り合ったままで朝を迎えた。

アグネータははじめ、わが家に男をいさせるということは、「自分に独り言を言わなくてもいいようにしてくれる人間」(p. 85)が入ってきたことぐらいだと高をくくっていたが、アンドレースが自分のマンションに帰るため

固い玄関のドアを閉めた瞬間に、彼女は自分が見棄てられたような感じになり、彼のあとを追い駆けて、戻ってきてと頼もうと思った。あのひとが戻ってこなかったらどうしよう！ (p. 91)

更年期も過ぎてから、35年ぶり、いわば初恋の人と初めて結ばれてアグネータは少女のように幸せだった。

彼女は前に進んでいって彼のうしろからその両腕を取って、顔を彼の肩胛骨のあいだに埋めた。彼女はそれくらい、ほんとうにほっとしていた。ここに、いまは自分のものになった男がいて、彼は限りなく健康そうに見える。(略) それから彼女は彼の手を取り寝室に導き入れて、ドアを閉めた。(pp. 110f.)

しかし8月最初の日曜日、アンドレースと初めて激しい口論をして別れたあと、アグネータは強い後悔の念にとらわれる。

これは実際、二人の幼児をかかえてヤーンに棄てられた時よりも悪かった。あの頃は、彼女にはまだ望みがかけられる別の人生があった。でも、いま彼女は、これは男が彼女の人生から去ってゆく最後の時だ、代わりに誰かが現れることは二度とないのだということが分かった。これは決定的な別れだ！(p. 115)

大人のふたりはもちろん仲直りをした。アグネータはとても幸せだった。そしてよく考えることもなく、アンドレースの求める「紳士協定」に同意して、彼がいう「もっぱら僕的女であって、僕の医者ではない」関係に入る。

彼女は敢えて尋ねようとはせずに、頭を彼の肩にもたせかけ、そのまま座っていた。彼のほうは何も言わずに、彼女の額の小さなこぶが感じられるところに指を当てていた。肝心なことは、ふたりがまた仲良くなることだった。彼が彼女を見棄てようとしているのではないということが、唯一重要なことなのだ。(p. 118)

アグネータはアンドレースという決まった男友達ができてから、他人に「見られる」(p. 119) 幸せも取り戻した。ふたりの再会後まもなく、父親に似て女性に弱いヨアキムははやくも直感していたように、

何かが起こったにちがいない。それは、彼女がいくら自分を鏡に映してみても見えない変化、男性たちの目から見て彼女を注目するに値するものにしている何かだ。彼女はさびしい未亡人から変わってしまった——何に？セックスの対象ではない。そうは自分では感じなかったから。たぶん人間に変わった？(p. 120)

アンドレースはアグネータのもとで同居を始めてから、妻と正式に離婚を話し合うために彼女に会うことになったと告げた。

「それが片づいたら、僕は君と結婚したい」

しかし、アグネータは文字どおりには受けとめられない。

彼はどうして自分の病気のことをあんなに長いあいだ黙っていたのかしら？彼は嘘もついた——あれはつかずにいられなかったんだわ！動機はこじつけだった。「君には僕的女であって、僕の医者ではあってほしくない！」というのを感じることは無理だ。ことばをひっくり返したら、隠されていた本心が見えてくるわ——「君には僕の医者であって、僕の恋人ではあってほしくない」

まったくもう！いけない、そんなふうに考えちゃいけないわ。そんな考えは

全くほんとうに否定的、破壊的だわ！ 彼女は数回深呼吸をして気を落ち着かせ、キッチンに戻っていった。（略）

「いいわ、そうになったら私たち結婚しましょ！」（p. 141）

アンドレースと妻は別居しているはずだが、アグネータには詳しく知らされていない。35年ぶりに再会したとき彼女が彼の私生活に触れると、彼は自分の結婚生活について語っていた。

「それをどう見るかによるね。いっしょに暮らしていないんだ、妻と私は。長年にわたる崩壊とでも呼べばいい。ある日あれは自分の夢を実現したい、マクラメ編みを始めたいなんて思い込んで、家を出ていった。だれか他に男ができたというわけではないんだ。あの時は分からなかったが、新しい男女関係を始めようとしてしているのだから、三十年の結婚生活を棄ててしまうなんて私には理解できない。テキスタイルの仕事をするためというだけで」（p. 15）

しかし、彼の妻の離婚を求める原因はほんとは別のものであった。病院のベッドでアンドレースが激痛にうなされながらつぶやいたことがあった。

「僕たちはとにかく子供を持てなかった。（略）欠陥があったのは僕のほうなんだ」彼は続けて言った。

「あなたが言っているのは、あなたとモーナにあなたたちの子供がないってことなの？」

「君が僕と結婚していたら、君も子供を産めなかったんだ」

これは、彼女が一度として考えもしなかったことだ。（p. 260）

ここから、アンドレースの妻の本心が透けて見えよう。夫の不妊症のために鬱積していた不満がついにあふれ出た“熟年離婚”の決行というべきだろう。

アンドレースが腫瘍のことで病院に出かけた日、彼の息子エルマルがアグネータに電話をかけてきた。

「もちろん僕はとても有難いと思っております。現在の状況では」

現在の状況では？ 彼はアンドレースと彼女がいっしょに住んでいるという事実を指しているのだろうか、それともアンドレースが病気だという状況を指しているのだろうか？

さらに尋ねてみると、息子はこの日父親が腫瘍専門医の診察を受けることまで知っていたのだ。

「いいえ、妻と私は父がこのまえの聖霊降臨節〔注：復活祭後40日目の祝日で5月もしくは6月になる〕にやってきたときにはもう、父はなんだか変わったなと思ってました」

（略）

「どう言えばいいのかよく分かりませんが、妻と私はあなたと父がまた再会されたことをとても喜んでおります。それに、あなたがお医者さんだということも」

(略)

「父があなたのようないい方の世話を受けていることに、改めてお礼申し上げます」(p. 145)

彼女がそれまでただ空想していたにすぎないことが本当ならば、この会話からとも不愉快な結論をどうしても導き出さざるを得なかった。その結論とは、アンドレースが彼女を訪ねてきて彼女のもとに留まっているのは愛情からではなくて、全くの計算からであつたろうということだ。(p. 146)

アグネータの疑念はさらに広がる。

彼の妻も実際はこの陰謀の片棒を担いでいるのかもしれない。ふたりは別居なんて全然してないんだわ！ この考えを実際に思いついたのはたぶんモーナだ。アンドレースはそんなタイプの人間じゃないもの、策略を企めるほど！ 妻が企んだにちがいないわ！ 彼女は夫が病気だと知らされたとき、彼が昔の恋人について語っていたことを思い出した。そして彼に、いまなら自分専用の医者を手に入れるチャンスがあると話したんだ…(略)

いいえ、いいえ！ ちがうわ、全然つじつまが合っていない！ 彼は何度も繰り返して、彼女を自分の医者にはしておきたくないって言わなかった？ — それにふたりの間にはふたりだけの協定があるじゃないの！ でも、最初は彼女の世話を受けようとしなくて、その後…ということが戦略の一部だったらどうだろう？ その後になって、いつのこと？ 確かにいまがその頃合いだわ！ 彼はいま彼女を必要としている。しかし、そのことは彼には理解できない、自分には時間がたっぷりあると思ってるんだわ。実際に彼は、いま自分が病歴のどのあたりに、どの段階にあるのか少しも知らないし、どんな種類の助けを必要としているのかはもっと知らない。

彼女はこの問題を冷静に見きわめることに決めた。(p. 147)

この後しばらくしてアンドレースは妻モーナに会うことになった。約束の場所オペラ座まで、アグネータは彼を車で送る。

そこに彼は早目に行きたかった。彼はいつもそうなのだが、彼女にモーナとぶつかる危険を冒さないようにさせようとして彼が早めに行きたがっているというふうに彼女は考えざるを得なかった。(p. 151)

オペラ座を出るときにアンドレースは転倒して病院の緊急医療科に運び込まれ、これを契機にアグネータが例の協定を“破棄”して、「あなたの女、そしてあなたの医者として自由に行動する」(p. 153)ことを一方的に宣言し、彼の“妻”兼医師としてできるかぎりの努力をすることとなる。彼女は海外の医師もふくめて何人もの専門家に相談して最適な治療プランを決め、彼に説明するものの説得に失敗する。

「アグネータ？」

「ええ。大丈夫よ、あなたを見棄てなんてしないわ」

「何が起こってもか？」

「ええ、何が起こっても」と答える決心はできずに彼女は、立ち上がって彼の頭を自分の胸に抱き寄せた。(p. 175)

その後は、アンドレースはおおよそ普通の体調で、少々疲れやすく、痩せてきた程度だった。アグネータのほうは、彼の病状悪化を恐れる一方でその兆候が現れることを期待している。兆候が見られれば、少なくとも病状についてははっきりするからだ。

彼の無気力は、ふたりがベッドに入った瞬間に消えてしまった。(略) 以前の彼はまさぐりながら愛する男ではなかったが、いまは掴むことや体を曲げることの一つ一つを試みるのがいかにも大切であるかのように技巧を弄した。彼は、それまで触れたことのない彼女の体の部分に向かっていった。(p. 177)

11月に入ってからアンドレースの体調は著しく悪化して、もはや医師の目を欺くことは不可能になっていった。そうして彼は、安楽死実行の約束をアグネータに迫る。それに対して、医師である彼女は約束すると明言できなかった。

「アンドレース…」

「いいよ、もうその話はよそう。僕は自分の状態を説明されたんだ！」

彼は立ち上がって足をひきずりながらキッチンから出ていった。待って！ と、彼女は叫びかけそうになった。説明させて！ 私がどうして断るか理解してくれなくちゃ！ あなたは不可能なことを求めているのよ！ そうするのは私の良心に反するわ！ そう考えただけで… (pp. 195f.)

アンドレースは足をひきずることは徐々になくなるが、代わりに背中の痛みが顕著になって体を曲げられなくなっていく。激痛はことに夜間に襲ってくる。しかし、アレルギー性体質の彼には即効薬は使えず、睡眠薬を多く使用するのが関の山だ。看病の疲れからアグネータは重病のパートナーのことをこうも思う。

私が自分は愛していると確信している男、しかし私の精力をすっかり吸い取ってしまう恐れのある男、私を妻——全くそんなものじゃないけど！——から看護婦に変えようとしている男。こんな考え方はもちろん醜悪だわ、意地が悪い、利己的だわ！ でも、事実を否定して何の益があるっていうの？ 彼女は自分が畏に、恋人をおとりにした畏に落ちたように感じた。(p. 201)

やがてクリスマスシーズンが近づき、アンドレースは大体は自宅で苦痛に耐え続けていた。しかし、背中の激痛が昼夜を分かたず襲うようになり、モルヒネの使用が開始される。ふたたび輸血のために入院したアンドレースはがんの脳への転移を強く疑われ、アグネータは医師たちから特別検査を提案されたが、それは断った。その真夜中、目覚めたアンドレースがアグネータに安楽死の実行を求めた。彼女は翌日自宅に戻ってきたアンドレースの状態が悪化しているのを見て、彼の懇願をかなえる準備をして、彼のベッドわきに戻る。

しかし、彼女はできなかった。彼女はただ椅子に座って彼の上方の壁を見つめて

いた。彼女はなんの後悔も、なんの不安も、なんにも感じなかった。彼女の頭はすっかり空っぽだった。しかし、彼女は自分の足を動かせない。彼女は自分の足を見下ろす。確かにそこに足はあったが、もはや彼女のものではなかった。彼女は下半身のないトランプのクイーンだ。彼女は自分の脚の感じがしなかった。だれかが気を配って椅子の前にだぶだぶの靴を一足置いてくれたようだった。(p. 263)

そして、この冬の深夜に、重体のアンドレースが家から消えてしまった。彼をマンションの外まで捜しても見つけれなかった

彼女は中に入って、体を暖めるためにコーヒーを沸かした。すべてがほとんど不条理に、そして非現実的に感じられた。あたかも彼が彼女のもとにいなかったか、あるいはほんの短い時間訪ねてきただけかのようにだった。心配のまっただなかで彼女は逆説的な安堵感を覚えていた。彼に責任を負っているのはもはや彼女ではなかった。しかし、彼女は怒りも感じていた。彼が突然出て行ってしまったことにではなく、彼が半年まえに姿を見せたことにだ。まるで感情泥棒、結婚詐欺師、下心をもった男みたいに。事実そのようであったのか、実際のところ彼女には分からなかった。(略)

彼女が、これで二度目だけれども、彼の大切な恋人でなかったことは、彼も同程度に彼女の大切な恋人でなかったように、かなりはっきりしていた。ふたりはもう大人だ。二人の人間がいっしょにいて楽しく過ごす、いっしょに外出する、おしゃべりして、セックスで少し与え合えるところがあるだけで十分なのかもしれない。(pp. 266f.)

このように、アグネータは最後の最後まで、なぜアンドレースが彼女に接近してきて同居までするようになったのか、確信できずじまいだったが、それでも、安楽死実行をめぐる娘との議論の終わりにこう言えた。

「(略)あなたは私の立場にいなかったということを言いたいだけ。あなたは一度もほんとうにアンドレースに近い人間ではなかったのよ」(p. 277)

4. まとめ

小説『昔の恋人』の一方のテーマである中高年男女の愛情について、前章で女主人公の揺れる心理を追って詳しく見てきたが、終わりに簡潔にまとめておきたい。

アグネータは夫エーリックを亡くしてから男なし歴5年で、もう男は卒業したと確信していた。しかし、35年ぶりに初恋のアンドレースと親密になったとたん、一人の恋する女性に戻ってしまった。

彼が固い玄関のドアを開めた瞬間に、彼女は自分が見棄てられたような感じになり、彼のあとを追いつけて戻ってきてと頼もうと思った。あのひとが戻ってこなかったらどうしよう！ 男のひとたちってとても変なんだから。彼らは「行きます、ちょっと新聞買ってくるから」と言ったりする。そして、その後二度と

姿を見せなくなったりするもの。(p. 91)

アグネータは、アンドレースが自分のもとを去ってしまえば「これは男が彼女の人生から去ってゆく最後の時だ、代わりに誰かが現れることは二度とないのだ」(p. 115)と認めざるを得ず、「彼女の大切な恋人ではない」(p. 267)と承知しながらも「ほんとうにアンドレースに近い人間」(p. 277)として、事実上の妻として、彼を介護した。それでも、がんに苦しむ彼の安楽死実行の懇願を土壇場で、まさしく彼へのその愛情ゆえに、かなえてやれなかったのである。

一方アグネータに対して、妻と別居中とはいえ、彼女が出した診療所の新聞広告を見て会いにきたアンドレースは、一体どんな気持ちでそうしたのだろうか——「それは相変わらず昔を懐かしんでいるだけなのか、それとも、よりを戻そうとしているのか？」(p. 51)、あるいは「年を取りかけているが、まだ年寄りではない未亡人」(p. 146)を欺くためなのか、「自分専用の医者を手に入れる」(p. 147)ためなのか、あるいはそれらの全部を手に入れるためなのか、最後まで明らかでない。このあいまいさは、すでにふたりが初めて朝食を共にしたとき、アグネータがアンドレースに彼女の診療所を訪れた理由を尋ねたのに返した彼の答えにも感じられる——

「口実だ。僕は君に会いたかった。そんなに变かい？」

「口実って、何の？」

「それは君も察してと思うが」(p. 63)

しかしながら、作家がアンドレースに担わせた役割はそれらのいずれにもまして、安楽死を切望する患者としてのそれが優先していると理解するのがもっとも自然であろう。それでも、アンドレースが最後の最後まで彼を死に至らしめるようアグネータに執拗に求められなかったことは、彼の彼女に対する配慮、あるいは愛情の表れと解することができるかもしれない。

実行寸前で安楽死を思いとどまったという結末は、読者にとって、論理の帰結として安楽死を断行する医師の強固な意志を描き通すことよりも遥かに人間的で、受け入れやすい。もっとも作家自身ははじめから、主人公に安楽死を断行させるつもりはなかっただろう。さもないければ、小説そのものは全く異なった展開をして、全く異なった結末となったはずである。それ以上に、ただ一人の医師に安楽死の始めから終わりまでを実行させることは、以下で紹介する P C Jersild の考え、立場と相いれないものであり、またオランダでの経験から学んでいる彼にとっては不可能であるにちがいない。小説の主人公である女医は、がんに苦しむ恋人が懇願していた安楽死を、そのための注射液、フラスコ、アンプル、包帯などを買い揃えて準備を整えたにもかかわらず、結局は実行できなかった。彼女は土壇場で「ヒポクラテスの誓い、つまり医師の倫理の第1戒『決して命を奪ってはならない』」(p. 249)を思い出したのだろうか。あるいは「そうする勇気と加力はなかった」(p. 277)のだろうか。文学的創作としては、前述のように、彼女が35年ぶりに抱いた彼への古い愛情ゆえにかなえ

てやれなかったと理解する。

作者 P C Jersild 自身は、この小説によって社会に問題提起したテーマ、安楽死 (eutanasi「良い死」)、つまりスウェーデン語でいう “dödshjälp” 「死補助」について現実にはどのように考えているのだろうか。小説出版から間もなく彼が新聞や雑誌のインタビューを受けているので、その中から彼の考えを引き出してみたい。

スウェーデンの現状をみると、積極的な安楽死や自殺補助は法律で禁止されている。そして年間に約9万5千人が死亡し、そのうち約5割はがん、その他の病症によって激痛に苦しんでいるとされる。この状況のもとで行なわれた小規模のアンケート調査の結果によれば、安楽死をめぐるスウェーデンの医師たちの意見は賛成、反対、特に見解なしがそれぞれ3分の1とほぼ等分に割れている (Carlsson 1995: 20)。自身医師でもあった Jersild は以前から中央医学倫理審議会 (Statens medicinsk-etiska råd) の有識者委員を務めている。1980年代末から同審議会は安楽死問題について集中的な討議を行なってきた (Dunér 1995: 18)。この公的機関から Jersild はオランダに派遣されて、同国における安楽死の実態を視察した。(なお、オランダの現状は1章に挙げたNHKプロジェクト・チームがまとめた文献に紹介されている通りである。)「死は文化現象であり、さまざまな死がさまざまな文化にある」(Jersild 1990: 46)と考えていた彼自身は、以前は死や安楽死について特別な見解をもっていなかったそうである。しかし、オランダにおける見聞の結果、安楽死は擁護可能であり、またときには望ましいものでさえあるという考えを強くするようになったと述べている (Dunér 1995: 18)。彼の基本的な立場は、生体臓器移植の場合と同じく安楽死の実行に当たっても、関係する当事者たちが自己の自由意思によって同意すれば問題はないというものである (Dunér 1995: 19)。彼のこの考えをもっと進めれば、「自らの生命を自ら決定する人間の権利」を尊重すべきものとなる (Dunér 1995: 21)。この主張は、小説のなかでアグネータの若い息子が哲学専攻の学生が語る解釈に重なる――

「だれでもそれぞれ自分自身の生き方を決定することを許されてしかるべきではないだろうか？　そして、その場合は、自分自身の死に方を決定することも？」
(p. 209)

したがって Jersild は、安楽死の関連でも「死を目前にしていて激痛に苦しむ患者が望むならば、その死を早めてやることが可能であってしかるべき」で、また「すべての人間は苦痛と不必要な治療を受けることなく死ぬ権利を有するべき」(Carlsson 1995: 20) だと考えている。

小説に立ち返ってみると、オランダの現状を説明している部分がある。登場人物中に病院巡回牧師のアルド・ユーハンソン (Aldo Johansson) がいる。彼とアグネータは、彼女の母親が入っている老人ホームで出会った折にことばを交わしていた。彼女は、異性としての自分に強い興味を抱く牧師に男友達の話をすることに気は進まなかったが、それでも宗教者としての彼に打ち明けた。

「確かに私は、もう終わりにしたいのです。私のためではなくて彼のためです。

彼は十分に苦しみました。でも、私はどうしたらよいのでしょうか？」(p. 245)

直接これには答えずに牧師は、かつて船員教会牧師をしていたオランダでの経験を語る。彼はその時期、オランダ女性と結婚していた。この女性の母親は不治の乳がんにかかっている、病気が判明したときにはもう手遅れになっていた。

義母の唯一の願いは、転移が脳まで及んで彼女の理性を損なわないうちに死なせてもらいたいということでした。彼女は、彼女自身が表現したように言いますと、生きたまま死なせてもらうことを欲しました。(p. 246)

安楽死をめぐる病人と家族のあいだで長い議論が続けられたのち、彼女の意思が尊重された。安楽死実行の日、

私たちは約十五人集まりました。子供、義理の息子と娘たち、それから大人になりかけた孫が二人でした。教区牧師も立ち会い、短い説教をしました。それから私たちは賛美歌を一つ歌いました。最後に医師が義母に、証人が立ち会っているところで、あなたは本当に終わりにしたいのですかと尋ねて、彼女がはっきりと大きな声で、はいと答えてから、医師は彼女の手の甲に注射針を刺しました。それから、彼は彼女の上に身をかがめてその額にキスをしたのです！」

(略)

「十五分、二十分してから医師が、彼女は亡くなりましたと宣言しました。すべてがそんなにも静かに進みました。ため息も死の断末魔も全くありませんでした。まるで彼女がそおっとこの世の命から滑り出てゆくようでした。妙なことです、私は小舟を、進水されることになって後ろ向きに水に滑り下りてゆく船を、考えてしまいました…」(pp. 247f.)

上の「生きたまま死ぬ」(“dö levande”)とは、自分で自分自身のことが十分に分かっている間に死を迎えること、死の自己決定ということであろう。安楽死を強く望みながらも自然死を迎えたあるオランダ女性は、生前に次のように語っている。すなわち、「自分で何もできなくなったら、もう生きているとはいえない。自立して生きているという実感がなくなったとき、私は安楽死するんだ」(NHKプロジェクト 1996: 69)。Jersild がその最新作の中でもっとも強調したいことは、個人の自己意思決定の権利を最大限尊重すべきということであろう。そして論理の帰結として、それには生死をめぐる各個人の意思決定も含まれることになる(Dunér 1995: 20f. 参照)。

(1996-09-16)

Om P C Jersilds roman *En gammal kärlek* (1995)

och den kvinnliga läkarens känslor inför sin gamle dödshjälpönskande vän

Kunishiro Sugawara

Sammanfattning

Artikeln är en presentation av den svenske författaren och läkaren P C Jersilds senaste roman *En gammal kärlek* (Bonniers 1995) med två ämnen: dels eutanasi eller dödshjälp, dels förhållandet mellan en man och en kvinna, som förnyar en 35 år gammal ungdomskärlek.

I avsnitt 1 refereras en händelse från april 1996 då en överläkare i Kyoto på eget initiativ lät en cancermärkt patient dö utan att fråga vare sig patienten själv, dennes anhöriga eller sina egna kollegor. Läkaren påstod sedan att det var dödshjälp. Därefter följer en kortfattad redogörelse för den nu över hela världen så kända inställningen i Holland till dödshjälp, som en kontrast till de alltså mycket vaga förhållandena i Japan. För den japanske läsaren som vill få veta mera om Jersilds syn på dödshjälp, finns i avsnitt 2 och 3 en utförlig resumé av romanen i japansk översättning; i avsnitt 2 främst inriktat på berättelsens förlopp; i avsnitt 3 med fokus på den kvinnliga huvudpersonens tvekan inför "läkaretikens första bud, att aldrig ta liv" (sid 249) och hennes insikt som kvinna "att det var sista gången en man gick ut ur hennes liv, det skulle aldrig komma någon i stället" (sid 115) för sin döende vän, som ändå inte är hennes "stora kärlek" (sid 267); det är just denna kärlek som i sista stund får henne att avhålla sig från att låta honom dö.

I avsnitt 4 försöker jag bedöma verket som en lyckad kärleksroman och där efter påpekar jag, genom att analysera svenska tidningsintervjuer med Jersild, hans åsikt kring död och dödshjälp. Som romanförfattare tycks P C Jersild lik som i tidigare verk även denna gång undvika att tvinga på läsaren sin egen uppfattning. Men det står klart att han anser att man ska visa respekt för människors rätt att själva bestämma över sina egna liv (se även Dunér 1995: 21).

作 品

Jersild, P C. 1995. *En gammal kärlek*. Stockholm: Albert Bonniers Förlag.

参 考 文 献

- 池田良彦．1995．「死の定義をめぐる法律的問題」，立山龍彦編著『高齢化社会の法的側面』，1-36．東京：東海大学出版会．
- N H K 人体プロジェクト．1996．『安楽死 生と死をみつめる』．東京：日本放送出版協会．
- 麓 昌平．1995．『安楽死事件』．東京：近代文藝社．
- 加賀乙彦．1991．『脳死・尊厳死・人権』．東京：潮出版社．
- 小松美彦．1996．『死は共鳴する 脳死・臓器移植の深みへ』．東京：勁草書房．
- 近藤 誠．1995．『「がん」ほどつき合いやすい病気はない』．東京：講談社．
- Hägg, Göran. 1996. *Den svenska litteraturhistorien*. Stockholm: Wahlström & Widstrand.
- Jersild, P C. 1990. *Humpty-Dumpty's fall*. Livsåskådningsbok. Stockholm: Bonniers.
- P C ヤシルド著・菅原邦城訳．1991．『生きている脳』．京都：人文書院．

新聞・雑誌記事

朝日新聞 1996年6月－8月．

- Carlsson, Ann-Cathrine Björnrör. 1995. "Hur kommer du att dö?", *Aftonbladet*, Söndagstidningen 3 september 1995. Nr 36, 18-23. Stockholm.
- Dunér, Anna. 1995. "P C Jersild tar upp dödshjälp i sin nya roman: En konflikt som ryms inom kärleken", *TROTS allt. En tidning för livet*. Nr 7 1995, 18-21. Stockholm.